

日本語・日本語 教育を研究する

第28回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマは〔コミュニケーションのための日本語教育文法〕です。

コミュニケーションのための日本語教育文法



大阪府立大学人間社会学部教授 野田 尚史

1. 日本語教育文法は絶対的なものではない

日本語教育で使われる文法はほぼ決まっていて、それに従って教えなければならないと思っている人が多いようです。たとえば、テ形は初級前半で教えるとか、受身は初級後半で教えるといった「常識」です。

しかし、これまでの日本語教育文法は、文の構造だけが重視され、実際のコミュニケーションはあまり重視されなかった時代に考えられたものです。

日本語でのコミュニケーションがうまくできるようにという目的のためには、これまでの教育文法とは違う文法が必要になってきます。これまでの文法を絶対的なものとは思わないで、たとえば次のような方法で、コミュニケーションのための新しい文法を考えてみましょう。

2. 日本語教科書の不要な文法項目を洗い出す

日本語教科書を使って、「こんな文法項目を教える必要があるのだろうか」と思ったことはありませんか。そこから出発するのも一つの方法です。

たとえば、初級教科書で、「書け」のような「命令形」や、「書けば」のような「バ形（条件形）」を教えるものがあります。そのようなものを見たとき、「これは必要なのだろうか」と疑問に思い、「初級では要らないのではないか」と考えてほしいということです。

さらに、「なぜこの初級教科書では命令形やバ形を教えることにしているのか」も考えてほしいと思います。その答えは、「動詞の活用形を全部出したい。つまり、Iグループ動詞（五段動詞）では、「書け」や「書けば」のようにエ段（この場合は「け」）を使う活用形も出したいから」ということになるのではないかと思います。これは、日本語の構造をすべて教えたいからであって、コミュニケーションに必要なからではないということです。そこを見抜いてほしいわけです。

3. 日本語教科書に必要な文法項目を見つける

一方、コミュニケーションに必要なのに、これまで取り上げられてこなかった文法項目もたくさんあります。

たとえば、誘いを受けたときの断りかたです。先輩から食事に誘われたとします。「ありがとうございます。でも、今晚は行けません。バイトがありますから」というように、構造的に整っている文で答えるのがよいでしょうか。「うーん、ちょっとー、バイトでー」というように、構造的に整っていない文で答えるほうが、むしろ相手により印象を与える場合も多いでしょう。

断るときは、文の構造より、言いよどむような話しかたや、「ちょっと」のようなことばが大きな役割を果たします。これまでは、このようなことは文の構造とは関係ないとして切り捨てられてきましたが、コミュニケーションのためには大事な文法項目です。

4. 母語話者の言語使用を観察する

それでは、コミュニケーションに不要な文法項目や必要な文法項目はどうしたら見つけられるのでしょうか。考えられるのは、次の3つです。

- (1) 母語話者の言語使用の観察
- (2) 既習の文法項目の習得状況の調査
- (3) 相手の感情を害する誤用例の発見

まず、(1)の「母語話者の言語使用の観察」ですが、たとえば、初級教科書の初めに出てくる「～じゃありません」という文型で考えてみましょう。

母語話者の言語使用を観察すると、話しことばでは、フォーマルなときに「～ではありません」が使われるほかは、「～じゃないです」がよく使われることがわかるはずですが、「～じゃありません」はあまり使われません。

また、「～ようです」や伝聞の「～そうです」も、話しことばではあまり使われないことがわかるはずですが。

5. 既習の文法項目の習得状況を調べる

文法項目の必要性を考えるために、既習の文法項目がどれくらい習得できているかを調べるのも有効です。

たとえば、初級で受身を習った人たちが、中級になって、どれくらい受身を使っているかを調べるということです。調べてみると、話すときも書くときも、ほとんど受身は使われていないという結果になると思います。

そのような結果が出た場合、「初級段階で苦勞して受身を教えてもムダだ」ということがわかります。そして、「初級では受身を使って話したり書いたりできるようにしないでよい」と割り切れるようになるはずで

6. 相手の感情を害する誤用例を探す

コミュニケーションに必要なけれどこれまで扱われてこなかった文法項目を見つけるには、誤用例を探すのがよいでしょう。特に相手の感情を害するようなものです。

これまでの誤用例研究は、「映画館の前に待っています」の格助詞の誤用など、文の構造にかかわるものが中心でした。しかし、そうした誤用は、相手の感情を害することはないため、それほど重視する必要はありません。

それより、「これ、いいですね」に対して「それ、いいですよ」と答える終助詞の誤用など、文の構造よりコミュニケーションにかかわるものを重視する必要があります。「それ、いいですよ」と答えた人は、相手の言うことに同意して、「いい」ということを強調するために「よ」を使ったのでしょう。しかし、それを聞いた相手は、「私が最初に言ったことを無視して、自分が最初に考えたように言っている」と思い、不快に感じるかもしれません。

7. コミュニケーションに必要な文法を追究する

コミュニケーションに必要な文法を考えるとときに大事なことは、抽象的な文法を考えるのではなく、具体的に役に立つ文法項目を一つひとつ見つけていくことです。

そのためには、「聞く」「話す」「読む」「書く」という4つのコミュニケーション活動を分けて考えることが必要です。うまく話すための文法項目と、うまく読むための文法項目は、大きく違うからです。

たとえば、中級ぐらいのレベルでは、「～すればするほど」という表現は理解できたほうがよいでしょうが、使える必要はないでしょう。使おうとすると、「食べれば食べるほどお腹がいっぱいになりました」というような誤用が出てきて大変ですが、意味がわかるだけなら簡単です。

8. これまでの教育活動を振り返る

これまでの日本語教育では、「聞く」「話す」「読む」「書く」のどの教育活動でも、主な目的は文型や語彙の定着だったと考えられます。初級では特にそうです。

たとえば、「聞く」活動と「読む」活動では、最初に未習の文型や語彙を教え、「すべての文型や語彙がわかるはず」という状態にしてから、聞かせたり読ませたりすることが多かったと思います。聞いたものや読んだものがすべて理解できるような教育をしていたわけです。

しかし、実際のコミュニケーションではそんな状況はありません。これまでの教育活動は、構造中心のこれまでの日本語教育文法に対応したものであって、コミュニケーションを目的としたものではなかったと言えます。

9. これからの教育活動を検討する

コミュニケーションを目的にすると、「聞く」「話す」「読む」「書く」の教育活動はどうあるべきでしょうか。

「聞く」活動と「読む」活動では、日本語の音声や文字から必要な情報を読み取ることを中心にするべきです。わからない表現や語彙があったときに、推測したり、辞書を調べたり、無視したりする技術が重要になってきます。これからの日本語教育文法は、そのような技術に対応したものにしていかなければなりません。

また、「話す」活動と「書く」活動では、何かの目的を達成するために、音声や文字で表現することを中心にするべきです。だれにどんな目的で話すのか指定しないで自己紹介をさせたり、だれにどんな目的で書くのかわからない「私の国」のような作文を書かせても、コミュニケーション能力はつきません。これからの日本語教育文法は、「頼む」や「誘う」といった目的を持った談話や文章を作るのに役立つものにしていかなければなりません。

コミュニケーションのための日本語教育文法に関する基本的な参考文献

- コミュニケーションのための日本語教育文法についてさらに詳しく知るには：
野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、2005。
- これまでの日本語教科書の問題点を分析する参考に：
新屋映子・姫野伴子・守屋三千代『日本語教科書の落とし穴』アルク、1999。
- コミュニケーション上の問題点を考える参考に：
任栄哲・井出里咲子『箸とチョッカラク——ことばと文化の日韓比較』大修館書店、2004。